

日 本 と 日 本 人

梅 原 猛

今日は私がずっとやってきました日本についての研究、その一つの結論のようなものをお話したいと思います。

日本人はどういう人種であるか、そして日本人はどういう文化をもってきているかということをも多少医学や看護に関する話を強調しながらお話したいと思っております。

日本人がどうして出来たかということは、大変難しいことで、一つの学問ではなかなか明確には出来ないわけで色々な学問でそれを類推してみるしかありません。

この日本人がどうして出来たかということについて最近非常に研究が進み、ほぼ明らかになるようになっております。テレビなどでよく「日本人の祖先はどこから来たのか」というような日本人のルーツを探るといふ番組がございますが、最近ではむしろ日本人は相当前に何万年と前にすでに日本に住んでいた。それが、日本人の中心になっているようです。古くから日本国土に住んでいる人たちと、今から丁度2300年ほど前お米が作られるようになってからお米を持った人たちが中国の南の方から朝鮮半島経由で来てその人たちが日本に農業文化をもたらしました。古い日本人とこの新しくやってきた日本人との混血によって今の日本人は出来たという説がだんだんはっきりしてきました。

どれが昔からいてどれが新しくやって来たかということ、どちらも黄色人種で髪は大体黒くよく似ていますが若干の違いがあります。この違い

が地域によってかなりはっきり区別されるということが明らかになってまいりました。即ち、日本人に二種類のタイプがあるということです。古いタイプの古モンゴロイド型がその一つで、このタイプがまず日本に土着していたらしいということです。現在住んでいるのは東北地方で東北を中心に、北陸、山陰、そして四国では徳島、高知という裏側、九州では長崎や熊本という西の方、そして鹿児島、沖縄です。中でも北海道のアイヌの人たちが最も古いモンゴロイドのタイプを現わしていて、それに近いのが沖縄、そして東北ということになるということがわかったわけです。

これに対して、お米を持ってやって来た新しいタイプの日本人が、日本の中央を占めています。特に多いのが近畿で近畿から瀬戸内海沿岸になります。県で見ると愛媛、香川、そして岡山、広島、山口と北九州、そして東に廻って東海地方と南関東の人たちです。

どちらがほんとうの日本人かは、考え方によって違います。近畿の人が一番近いのは日本人の平均レベルより朝鮮であり、東北の人が一番近いのはアイヌの人だということになります。そういう2つのタイプがあることがわかってきたわけですが、この2つのタイプはどこが違うかということですが、天狗の顔とおかめの顔を思い浮べて下さい。天狗の顔が古いモンゴロイドのタイプで、おかめの顔が新しいモンゴロイドのタイプといえます。

古モンゴロイドは目や鼻や口が大きくひげがぼ

うばうで胴体に対して手足が長い。そして手の指紋が回っている率が高い。大体わきががある。わきががあるということは、耳あかがネチャネチャしている。ヨーロッパ人の耳あかは大体ネチャネチャしていて日本人の耳あかは乾燥している人が多いのですが……。

それに対して新モンゴロイドは顔の鼻は小さく低い、目や口も小さいポチャッとして、凹凸がない。まだ日本人は凹凸はありますが朝鮮の人は日本人よりもっと凹凸が少ないと思います。蒙古の人は本当に凹凸が少ない。これが新モンゴロイドの典型的タイプということがわかります。そして毛が少ない。手足に対して胴体が長い。

何故モンゴロイドに2種類できたかということですが、信じられないような説ですが、今の人類学では、今から二万年前から三万年前に地球上が大変冷たくなった。最後の氷河時代がきた。それで毎年毎年寒くなって多くの人たちは逃げ出したのですが、逃げ遅れて氷河時代をいわゆるシベリア地方に閉じこめられた人たちがいた。それが何万年、何千年もの間寒冷地に生活したために寒冷地に適するように身体つきが変わったということです。

どうということかと言いますと、寒冷地に適応する遺伝子だけが生き残り寒冷地に適応できないものは死んでしまうということになり、それが何百年何千年と続くと人種的に変化が起るといえます。寒冷地に適応するためには、皮下脂肪を貯えなくてはならない。そのためには、なるべく身体の表面積を少なくしなければならない。手足は表面積が多いので手足を節約してなるべく胴体を長くして皮下脂肪を腹に貯える。顔は表面積が多いと寒冷地に適応しないのでなるべく表面積を少なくし節約して鼻を低くする。目がパッと開いていると氷るのでその寒さを防ぐために、新モンゴロイド特有の蒙古ひだというひだができる。毛も生えていると毛が氷って都合の悪いことがあるので毛も少なくなった。寒冷地適応をした人間が新モンゴロイドで寒冷地適応を経ない人間が古モン

ゴロイドです。

そして古モンゴロイドが日本列島では東北を中心としての言ってみれば日本のへき地に多く、新モンゴロイドは日本の中央部にいることとなります。これは今から二千三百年前まで日本狩猟採取社会でした。獣をとるにしても日本にはそう沢山獣はいないため、大体魚を食べていました。それに対して東日本はどんぐりの大量生産地帯でそのどんぐりを粉にして主食とし魚を副食として食べ、たまに獣の肉を食べるという生活をしてきました。この狩猟採取生活が日本では異常に発達しました。それは、日本では縄文土器が今から一万二千年前に作られております。一万二千年前に作られた土器というのは世界のどこを探がしてもございません。この土器が出来たということで食生活の大きな革命になります。それまで魚も焼いて食べるか生で食べるかしていたものが土器が出来ることによってそこで湯を沸かしそこへ魚を入れその中へどんぐりの団子にしたものを入れるというふうに食生活が革命的に変ったわけです。従って当時の土器の発明は、今の電気製品の発明に匹敵するような大変な発明だったわけです。そして日本ほど多くの土器が、しかも質の違ったものが出土する国はどこにもありません。これは日本の狩猟採取文化がいかに日本で発展したかということを示しています。それが約一万年続き、その文化が日本で非常に栄えたため農業の取り入れが大変遅れました。今から二千三百年ほど前に稲作農業を持った新モンゴロイドがやってきて水稻稲作を始めました。これが大変日本という土地特に西日本の水の豊かな気候の暖かい西日本にそれが合ってそれまでほとんど不毛の土地であった北九州平野とか近畿平野とか瀬戸内海一帯の平野が一大穀倉地帯になり新しい日本の国が出来ました。これらの平野は狩猟採取生活では非常に不毛の土地だった所です。従って古モンゴロイドの多い東北地方は農業が遅く栄えた所で、新モンゴロイドの多く住んでいるのは早くから農耕が栄えた所と考えればほぼ間違いはありません。

新モンゴロイドの人たちが住んだ所は昔は葦の生えた不毛の沼地だった。そこが米作の発明によって一番肥沃な土地になり、文明の中心がそこへ移ったわけです。そういうことで大変よく日本人の成り立ちが説明されるのですが、皆さん思い当る所がありますか。大体ペチャとした子は関西に多いに間違いはないのです。ほりが深く毛深いのは大体日本の偏境地帯に多い。

津軽には美人が多い、太宰治の顔も津軽の顔です。それからちょっといい顔では秋田美人、信州美人、新潟美人、みんな田舎のほうの人ですね。そして琉球美人がいますね。あまり大阪美人ということは聞いたことがありません。また、私は名古屋の出身ですが名古屋美人ということも聞いたことがありませんね。これは大変面白いのですが京美人といいますが、京美人というのは目も小さくて、口も小さく、鼻もちょっポツとしている。このかわいいのが京美人なんですね。決して目がカッと大きかったり鼻が大きかったりせずポチャッとした顔なんです。あれは新モンゴロイドが洗練されて型を整えた美人でございます。

色々なことが思い出されるのですが、たとえばうどんとそばの地帯なんですが、弥生地帯、新モンゴロイド地帯は大体うどん、縄文地帯、古モンゴロイド地帯はそばですね。これは四国ではっきり出ています。香川県と愛媛県はうどんですね。讃岐うどんというのは実においしい。ところが高知県と徳島県へ行くとそばでほとんどうどんを食べない。又、私の理論では相撲地帯と野球地帯が考えられますが、縄文地帯は大体相撲で相撲の強いのは縄文地帯から出ています。例えば北の湖、千代の富士、北天佑が北海道、隆の里が青森、朝潮が高知、若島津が種が島と全部偏境地帯です。一方野球が強いのは大阪、広島、名古屋等これらは弥生地帯です。

日本人が2種類あるということは医学的にも重要な意味を持っておりまして、現在問題になっていることとしては、遺伝性肝炎ですが、これはどうも新モンゴロイド地帯にはほとんどなく、その

ほとんどは旧モンゴロイド地帯即ち日本の離島とか偏境の土地に多いのです。これは遺伝学的な問題ではありますが、どうも新モンゴロイドでなくて古モンゴロイドに特有な病気ではないかというふうにされております。

今の人種論は医学とも非常につながっていると私は思います。こういうことはだんだん明らかになってくるものでありますが、ネズミも古モンゴロイド型と新モンゴロイド型があるということを手前研究発表で聞いて驚ろいております。秋田県から北のネズミとそれ以後のネズミは違うそうです。秋田県から向うのネズミはどちらかということ中国の南に近く、秋田県より南のネズミは朝鮮から中国に近いということなのです。つまりこれは土着の縄文人はむしろ南とつながる体質を持っている。これは遺伝性肝炎とつながるかもしれない。ところが、米を持ってきたと同時にネズミもやって来て、それらのネズミが繁殖してしまつて秋田県までその新しいネズミが占領してしまつて、秋田県以南にはまだ縄文ネズミががんばっておるわけです。

このようにして日本人は出来てきたわけですが、それでは文化においてどの点が縄文的であり、古モンゴロイド的であり、どの点が新モンゴロイド的であるかということですが、非常に簡単にいいますと、技術とか政治組織については米を持って向こうからやって来た人たちの文化が非常に支配的になってくるようです。

何故日本が農業国になったかは、農業生産の方が、従来の狩猟採取生活より生産力が高い、そのためそれを持って来た人たちが日本で栄えた。そして土着の日本人、縄文人も農業に変えた方がその生産力が高まり生きてゆけることを知ったと思われまふ。関西には新しい向こうから来た人たちが住みつきましたが、関東の農業者はむしろ縄文人がそのまま変つたものが多いようです。

こうしてこの生産方法は大変弥生的、新モンゴロイド的であつて、この新モンゴロイドが国を造つたわけです。国造りの方法においても新モンゴ

ロイド的で、彼らは外国から来たため絶えず外国の学問、技術、文化に敏感に反応し、次々と日本に新しい技術を招きました。そのため政治、技術では、新モンゴロイドによって支配されていました。しかし一方、政治や技術以外の風習、宗教、言語という点では土着の文化つまり狩猟採取文化即ち古モンゴロイドの人たちの文化の影響が強いのではないかと当然考えられます。

このようにみえますと色々な日本人の色々な文化の型がよく理解されてきます。言換えれば、日本の国は2つの隋円形のような国で隋円には2つの焦点があり、一つは古くからいる縄文人とその文化、もう一つは二千三百年前に新しくやって来た新モンゴロイドの弥生人という二つの文化があります。関東は縄文人の文化の伝統が多く、関西は弥生人の文化の伝統が多い。この二つの中心で日本の文化は隋円形で展開されたのであろうと思われれます。そのように考えると、鎌倉幕府がなぜ出来たか江戸幕府がどんな役割を果たしたかという日本の歴史もごく大まかな動きが説明されるのではないかと思います。

一つ二つお話を足しますと韓国は大体新モンゴロイドの人が多のですが、中国へ行くと色々で南と北では顔が違ってきます。そして中国では遊牧民や農耕民等色々いるので千差万別の顔をしています。このように中国、朝鮮、日本は大変似ているようで色々似ていないことがあります。

それは、中国や韓国では大変厳しい父系社会なんです。姓が大体限られていて韓国では百位、中国では四百位です。韓国の人口は約三千万人、そこに百の姓しかない。中国は八億の人口があつてその姓は四百しかありません。これは全部父系社会なので原則として姓は増えない。ところが日本では、一億の人口で何万という姓があります。そして中にはめったにない、その人一人しかないような姓があります。そのようなことが起こるのは父系社会ではないからです。それは双系社会と言って、二つの系、父親と母親があり父系社会では権

利をもつのは父親だけで、中国でも韓国でも結婚しても姓は変わらない。姓が変わらないということは、女はその家の人になれない、女は借りものにすぎないということです。ところが日本では結婚して姓が変わる。それは結婚によって一つの新しい姓が生まれるということです。従って日本では姓は無限に増えることとなります。

一方父系社会では血縁を超えた集団は作りにくい。例えば韓国ではある会社を作ると、金さんが社長だと後の社長は金さんでなければならない。金という姓でないと社長になれない。金だったら自分のすぐの親戚でなくても、何十代前の金でも社長になれる。そういう意味で言うと全部同族会社、そして同族は結婚できない。金とか季とかは1/4で韓国では1/4の人とは結婚できないということとなります。

韓国からみると日本人はいとこ結婚する。とんでもない話だというふうには受け止めています。日本の歴史を読むと兄妹(姉弟)結婚や、叔母と甥の結婚がある。そういう原則が日本にもあるんですけど、韓国からみると全く父系社会の性のタブーと双系社会の性のタブーは違うので韓国からみれば、いとこ結婚などとんでもない話だと、まして兄妹(姉弟)、叔母の話が日本の歴史に出てくるとは、これは野蛮極まる人間ではないかというふうに見られた。

これは社会の成り立ちが違うところです。もう一つ言うと紋というものも中国、韓国にはないのです。紋というのは、ヨーロッパでは貴族にだけあります。ハプスブルク家とかハンノーバー家とか鷲の紋や獅子の紋がついています。あれは戦士階級にだけある紋ですが、日本ではあらゆる人たちに紋があります。古い家には男紋や女紋があり、それが双系社会のシンボルなのです。

この紋がはっきりしてくるのは鎌倉時代で貴族よりも庶民つまり東国の武士のほうが、紋を重んじました。アイヌの狩猟社会では獣を射るのに使う矢に必ず紋をつけておきそれによって射落した鳥の所有者を見分けていました。従って狩猟

社会では必要欠くべからざるものでありました。これの発展したのが日本の紋であるというふうに考えられます。紋というのも狩猟社会の名残りです。鷹の羽紋は熊の紋だと思えます。熊が手を交差させるときの型で、それを変型させると鷹の羽紋になります。ああいうことをやった人達は昔熊狩りをやっていた人たちだと思って、まず間違いないだろうと思えます。

日本の核家族は父系社会ではできません。そしてこの核社会の強さが逆に今の日本のデモクラシーを受けつけた地盤です。父系社会のようではなく核単位でその中で新しい人間関係が作られて行く。これが今の日本の会社組織は父系社会より双系社会の方が発達しやすいといえます。

結論を言いますと、日本は農耕社会というふうに考えてきましたが、どうも農耕社会ではない。農耕社会と同時に古くから一万年も発展したあの高度な狩猟社会の伝統をどこかで日本人は受け継いでいる。そう考えないといけないと思えます。例えて言うと日本の食べ物に表われています。

日本人は寿司が大好きです。日本の象徴的な食べ物物は寿司です。今、ヨーロッパやアメリカで寿司が大流行です。最初、西洋人は天ぷらとかすきやきのようなものが好きだったのですが、これらは日本のシンボルではない、これらはヨーロッパ的なものだということが分かって今は寿司が大好きで、ちょっと日本の好きな人は寿司やさしみを賞味するという時代にきました。日本人の生産力の秘密がああ寿司にあるのではないかとって、アメリカやヨーロッパで異常な人気です。

私がアメリカで日本の話をしたとき縄文と弥生のお話をしたのですが、縄文と弥生のお話はよく分かったけれど、それを象徴するようなものはないかと言われたので、すぐ寿司のことを考え、日本の文化は寿司である。なぜならば、生魚とお米でできているから。生魚の文化こそまさに縄文の文化であり、狩猟採取生活の象徴である。その下に弥生時代からのお米があると。寿司こそまさに日本の象徴であると言いました。そうすると、よくわ

かったということになり、日本文化を理解するには寿司を食べなければならないということになり皆んなで寿司を食べにまいりました。

そうしたら面白いことにアメリカへ行くとお米の上にハムやソーセージをのせているのです。私にとっては決しておいしくはないのですがアメリカ人は結構喜んでソーセージのスシを食べていました。農耕文化と牧畜文化が結びついたわけですからここに新しい文化複合性がありますが、日本人はついに牧畜はしなかった。何故ならば、日本の農業は狩猟採取の影響があり、人間が米をつくるというより、自然と一体になって米をつくるという考え方が、日本人の基本的な考え方なので、人間が獣を飼って、獣に寄生して、獣を支配するという考え方は日本では受け付けなかった。というふうに説明したところ大変よく日本の文化を理解できたと言われました。

日本は表面は農耕国家のように見えますが、その根底に狩猟採取時代の考え方があると思えます。こういう考え方を生かさなければならぬと考えます。なぜならば、ヨーロッパ文明は農業牧畜時代の考え方を基礎としています。それは人間が中心であるという考え方です。

キリスト教によると神様は色々なもの、地球をつくった。そして木をつくり魚をつくり色々な動物をつくり最後に人間をつくった。そして人間には神の似姿である理性を与えた。そして人間に全ての動物を支配する権利を与えたというふうにあります。キリスト教の考え方がヨーロッパ人の基本の考え方ですが近代になると神様はいらないということで、神様を切ってしまうと、後に残るのは神様によって特権を与えられた人間と動植物のみであり、人間が動植物を完全に支配でき、支配する権利があるという考え方がヨーロッパの考え方でもあります。

そういう考え方でヨーロッパは近代文明を作ったわけですが、その結果驚くべき富が人類に生まれました。と同時に色々な矛盾も出てきました。それは自然の崩壊ということ。今アフリカの

飢餓が大きな問題になっていますが、これには色々な原因があります。基本的にアフリカが農業牧畜国家になったということが大きな原因です。というのは数百年前まではアフリカの地には青々と緑が茂っていました。そこへ焼畑農業の農耕民が入り木を切り、木を焼いてしまった。そこへ色々なものを植えてそして生活した。焼畑農業なのでまた別のところへ移ってゆく。そして、森林はすっかり崩壊してしまい草原になってしまう。そこへ牧畜民がやってきて、その草原を牛や羊に食わせて、その草原を砂漠化してゆく。砂漠化するとまた今度は別のところへゆく。このようなことが数百年続くと、さしものアフリカ地帯もだんだん森林が草原になり、草原が砂漠になってしまう。砂漠の面積が日に日に驚くべき速度で進んでいった。

このようなことがアフリカにおいて非常に極端に現われていますが、実は地球上の運命なのです。このように考えると、どうも人間中心はよくない。人間は本来動物や植物と同じ命を生きているんだと、人間の命の大切さを知ることは大事ですが、動物や植物にも命があることを、そしてその命を大切にすることをしないと人間は孤立化し、そして自分の住んでいる環境を急速に破壊して行くのではないかという不安があります。私はもう一度人間がそういう人間中心、自然支配の考え方を捨て、人間と自然のつながりを考える、そういう考え方にしなければならぬと思うのです。

そういう考え方が実は日本にはあると思います。それはずっと縄文時代の伝統の中にあります。例えば、仏教というものが日本へ入ってきました。仏教の中でも特に大乘仏教というのが入って来るのですが、大乘仏教がそれ以前の小乗仏教とどう違うかという点、大乘仏教は誰でも仏になれる、小乗仏教というのはもともと賢い人、立派な姓を持っている人、そのような立派な人が修行の結果はじめて仏になれるというエリートな仏教なのです。それでは一部の人しか救われぬというのですべての人が救われるような仏教が出来、それが

大乘仏教で、日本に根差したのは比叡山の一乗仏教です。一乗仏教は大乘仏教の中でも特に平等ということで、全てが仏になれるというものです。初めは人間だけが全てなれて動物はなれないという人間の平等だったものが、だんだん日本で仏教が土着するにつれて「山川草木悉皆成仏」山や川も草も木も全て成仏するという驚くべき思想になってきました。親鸞上人のいうどんな人間でも南無阿弥陀仏を唱えれば成仏できるという考え方が生まれてきました。

仏になるということは、お釈迦様は修業に修業を重ねてやっと仏になった。仏になって悟りを開いてどんな悩みも悩まないような境地になる。ところが日本では「あいつ成仏しおった。」といい誰でも死ぬと成仏できることになる。「おしゃかになったで…」という時は屑になったことをいう。日本人は昔からどんな動物、植物でも土器の破れたのでも全部貝塚という所に埋めました。あの貝塚という所は、貝のごみすて場ではないのです。貝の霊を天に送ったのです。貝は我々にみやげを持ってやってきた。みやげとは身であり、その身をいただいて貝の魂を天上へ送る。その貝塚には全ての成仏の動物の骨ばかりか土器のかけらなど全部出てきます。そういうもの全部の霊を天上へ送るという考えであります。まさに成仏するわけです。

こういう考え方が日本人の中にあるわけです。それは大変いい考え方だと思います。そういう動物や植物の命に対してもいたわりを持っていないような心では、とても人間にいたわりを持つことはできません。ヨーロッパ人はそれを冷めたく分けて考える。人間にいたわりを持つことはいいけれど、動植物はおかしいじゃないかという考えなのです。しかし、ヨーロッパ人でも心の中にはやはり日本人と同じような気持ちがございます。動物愛護ということが言われていますがそれは動物愛護なのです。日本では本来同じものと考えますが、ちょっと違うと思います。日本の考え方は狩猟時代の考え方で、その考え方が正しいと思います。農耕

牧畜をするためには、やっぱり動物や植物を差別しなければならぬ。その考え方はある点では正しかったけれど生産力をあげるという面では良かったけれど、長い人類の歴史から見れば、これは危険な考え方になってきたと思います。

もう一つ私が言いたいことがあります。それは皆さんと特に関係する問題ですが、それは死の問題です。皆さんは病人を看護されますが、看護して病気を治すことそれは看護の大きな役目です。しかし、どうしても治らない病気があります。そして人間は必ず一度は死ぬものです。どうしても治らない病人をどうするか、もう死ぬことが分っている人間をどう慰めさめるかということ、これは実に重大な問題です。

それをするには一体日本人はどのような死生観をもってきたかということです。これはだんだん明らかになってきたんですが、日本人がずっと縄文時代から抱いてきた死生観は魂はこの世に生まれて、そして母親の身体で肉となって、そして肉体をまとして生まれてくるのです。死ねば魂は肉体から出てそしてやがては天に帰るのですが、すぐには天には帰れませんので一時お山へ行き、お山からだんだん清められて麓の方から天上へ向きそして何年か経って三十三年経って天上にゆくという考え方が大体縄文時代の日本の考え方だったようです。

その生死の考え方は大体循環の考え方で、日本人の世界観というのは循環の考え方であり、全部世界は生と死の大きな循環の中にあるわけです。例えば太陽は出てきて、同じ太陽が地球が回っているのだから太陽が地球の影になって昼や夜が出来ると思えますが、とても古代人はそんなことを考えなかった。太陽は一旦出て夜になると死んでしまう。又、明るく日生き帰ってやってくるというように全てが生と死の循環であるという考え方です。

それで太陽は夏になると光が強くなって冬になると死んでゆく、死のうとしており死にはしないが非常に力が弱まってゆく。それに応じて木(縄文時代に栄えた落葉樹)は、春になると芽を出し、

花や葉を出し、実をみのらせ、冬になると散ってゆく、木もやっぱり生死を繰り返す。そして月の満ち干きも月が死んで又生き帰ってくるというように全てが大きな循環の連続であるとの考えから人間の魂も循環していると考えました。生と共に魂がこの世にやって来て再び魂は天に帰ってゆくという考え方です。

アイヌに残っている風習で一番大事な宗教儀式は葬式です。まず魂を早く天上へやらなければならない。それは人間ばかりでなく全ての生きとし生けるもの全ての魂を天に送る。天に魂を送るのが最大の宗教行事です。そして年忌という行事で魂をだんだん浄化させる、魂をだんだん上へ上へと送り三十三回忌を終えると魂は空へ登って行くという。だからお山というのは大体そういう霊の場所なのです。

大体多くのお山は人間の霊の世界であり、そこは死霊と生霊とが混じり合う所で、それが日本人の古くからの信仰なのです。このことは早く向うへ行っただけ早く帰ってこれる。このことはこの世はいい世の中だと思っていることであり、この世で皆んな生きたい、だから死んだらできるだけ早く無事に天へ送り届ける、そうすると天でまた魂が同じ家族をつくって生活している。そして又、その魂はいつか何十年、何百年したら帰ってくる、できるだけいい魂は早く帰ってくる。そういうことが日本人の世界観だったようです。だから皆さん孫が生まれた時「死んだおじいちゃんにそっくりだ」とか「おじいちゃんが生まれ変わってきたんだ」とよく言いますが、あれは本当に日本人の昔からの世界観であるのです。

そういう世界観が例えば団十郎という名前があると、団十郎が何人もいるとヨーロッパ人はおかしいと思うわけですが、団十郎が死んで又魂が帰ってきて二代目団十郎になってそして今の団十郎に引継がれているのです。下手な俳優が出ると名を汚すということで、もう誰も団十郎を名乗らなくなり循環が不可能になります。これは日本人の基本的な死生観のような気がします。

ところが面白いことには天にある魂はどうなるかという、天にいてじっと子孫を見ている。だから時々お祭りをして祖先の霊にお団子などを捧げます。そうすると祖先が喜んで子孫のことを色々助けてくれるという信仰です。そして年に何回か子孫の所にやってきて子孫の無事を見守って又帰ってゆくという儀式があるわけです。これがお盆やお彼岸なのです。初めはお正月とお盆の2つだったのですが、それではちょっとさみしいので春と秋の二回年四回我々の所へ帰ってきます。お正月の門松は本来祖先をお迎えするものだったのですが、お正月は生きている人が沢山来るので死者が遠慮をして、現代は両彼岸とお盆とで年三回となりましたが、このようにお山から祖先がやってきて子孫の顔を見て、あまり長い間いると迷惑ですので、せいぜい一週間位、三日間位でもよいのですが、その位居いて帰ってゆくわけです。このような信仰が、日本人の信仰です。

死んでどこへ行くかということは、仏教では極楽浄土へ行くと言っていますが、柳田国男先生は日本人は本当に極楽浄土へ行くとは考えていないと言っております。というのは極楽浄土は十萬億とものすごく遠い所で、そこへ行ったら子孫のことなど見えず、様子もわからず又、帰って来られないから。だから極楽浄土へ行くというのは嘘で実際は、お山へ行って空へ行く、そしてずっと子孫を見ているのが日本人の信仰だと言っております。私はその通りだと思います。

私も六十才還暦になって去年病気をして、死にかけたわけですが、いつまで持つかわかりませんが、私はこの信仰はいい信仰だと思いますね。死んでしまうと又帰ってこれないと思うときみしいのですが、お山から天へ行ってお盆やお彼岸に時々帰ってきて孫が大きくなったのを眺めて喜んで、三日位いて帰っていくと、なかなかスマートだと思います。こういう信仰はいい信仰だと思います。

極楽浄土へ行くとは何でもおいしいものが食べられるとか、美人に巡り会えるとかいうふうに考え

るのは欲求不満の人間で貧乏と軋轢から生まれた夢の世界というふうに思います。そのような極楽浄土を夢みるのはいじましい感じがします。

今生きている世界とあまり変らない生活を天で送っていて又帰ってくるという考え方が私は一番いいように思います。また、人間の生命というのは私の子孫の中に残っていて、私共個人で生命は終るものではなくて永遠に残っていく、そして子孫の中で我々の遺伝子に非常に似たような子孫が生まれてくるかもしれない。そのことを又、再び帰ってくるというように表現してもいいと思います。

結論として、キリスト教の死後の世界は、キリストは天に行き又、帰ってくる時この世の中は神の国になるというのがキリスト教の考え方です。それまで死んだ人は煉獄で眠って、キリストが再び帰ってくる時又、起き上って普通の肉体になって着物を着て最後の審判によって、いい人と悪い人に分けられるという。そのような考え方も仏教の地獄と極楽に近い考え方であり好きになれない。最後の審判の時に起こされて「お前は地獄行きだ。お前は極楽だ。」と言われるとすると、地獄へ行くか不安で、たぶん地獄へゆくのではないかと眠っているのは困りますね。そのように人間を分けられない方がよいと思います。

私はこの世に執着を残した悪い人間以外は天に行って子孫の行く末を見つめて子孫の守り神になる。そして又、いつかこの世に帰ってくるという考え方が素直なように思えます。それは遺伝子というものが、そのような不思議な世界を現出する。何十年か何百年のちに私そっくりの子孫が生まれてくるかもしれない。それを生まれ変わりと考えても差し支えない。このような個人を超えた悠久の生命の世界の信仰をもう一度取り戻さなくてはならないと思います。

日本人の死んでお山へ行き、お彼岸、お盆に帰ってくるそういう老人があったらそれもよいのではないかと思います。それはあるいは科学的真理の象徴的表現かもしれません。私はそういう信仰

をもう一度考え直すことができればと思いますが、私自身中々信じられません。けれど信じたいと思います。その方が安らかに死んでいけるような気がします。

早く向うへ行ったらまた早く帰ってこれる。向うへ行っている間でも年三回位は孫の顔を見にこれるというのはいい考え方だと思います。おそらくそのような信仰を皆さんの患者さんも潜在的に

持っていると思います。

今日は日本人というものがどうして成り立つかというお話でございしますが。最後に日本人の死生観というお話は皆さんのお仕事と多少つながりがあるかもしれません。私は最近そういう日本人の死生観が大変、自然の考え方だというふうに思うようになりました。何かの御参考になれば大変ありがたいと思います。